



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』、『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)、『雲の上で出会った超一流の仕事の言葉』(あさ出版)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 258

林学・事始め、本多静六

東京・明治神宮の森は表参道の鳥居をくぐれば樹海が代々木駅まで続く。その樹木1,000本を伐採してのラグビー場新設に都知事が許可を出した。22万坪もある広大な神域は肥後藩邸や彦根藩下屋敷だったのを、明治天皇祭神宮として設立された。広葉樹林はすべて全国から献木の人工植林、勤労奉仕で造苑された森だ。

明治神宮や日比谷公園、偕楽園など全国有名公園造りを明治時代に手掛けたドイツで博士号を取得した林学者がいた。花崗岩の六甲山系は風化した土砂が洪水になって樹木は育たず、疫病をもたらしたが、ここも彼の植林で救われて今の神戸がある。本多静六は、明治維新2年前1866年に埼玉県久喜市の25戸の村の農家、折原家8人兄弟に生まれる。父親が40歳で急死して借金を抱えて赤貧に陥り、草刈や馬糞拾いで家計を助け、14歳から17歳まで半年だけ東京の学校に通い、農繁期には帰省して農作業を手伝った。東京・西ヶ原に官立山林学校が開校して先生から勧められて受験し、50名中50番目で合格する。数学など落第点を重ねるが、猛勉強して首席に上り詰める。上野の森で將軍慶喜の幕臣として官軍と最後まで戦った「彰義隊」隊長の本多晋^{しんご}は、一人娘の詮子^{せんこ}の婿として首席卒業の静六を選ぶ。詮子は官立竹橋女学校を首席卒業、17歳で海軍医学校に入学して24歳で日本4番目の女医になった才媛。6畳間に数人の貧乏書生から港区芝公園にある大名屋敷の御曹司になった静六、間もなくドイツ留学へと道が開く。ミュンヘン大学で勉学に勤しむ中、本多家から“銀行破産で預金が無になり送金を止める”と知らせが届く。手持ち資金が底をつく前に博士号を取得して帰国しなくてはと、3時間睡眠で超人的勉強を続け、教授が努力を認めて博

士号受験を許可する。失敗したら切腹する覚悟で最終試験に臨み奇跡的に合格! 静六は東京大学の林学助教授に25歳の若さで就任した。

神宮植林で静六は雑多の広葉樹を選んだ。杉を植えるべきとする大隈重信と対立したが、100年後の自然林を想定した造林を譲らなかつた。木材生産目的の人工的単一樹種造林と皆伐主流は治水と環境保全で天然更新と混交林へ変遷していた。種子が落下発芽、根株萌芽で成長する天然更新。人工造成でも生態学的に100年後は自然森林の林相になる。静六は「公園の父」と同時に「蓄財の神様」と言われる。ミュンヘン大学教授が贈った言葉「貧乏生活から解放されないと心身ともに自由が奪われて学問研究はできない。故国で就職したら蓄財に励み、何ほどの金額になったら日本など発展途上国は幹線鉄道会社や山林、土地に投資するのが良い」、赤貧少年時代の静六には身に染みる言葉だった。

助教授就任時は年俸800円、本多家の財産は既に無く、7人の子でくさんで11人の大家族は楽ではないが、不自由を強いてでも給料の4分の1を天引きして貯蓄し続けた。静六の目標は貧しい青少年たちの夢を応援する育英奨学財団を作ることであった。

社会で得たものは社会に返す、富は神より委ねられた神聖なもの、企業は奉仕機関であって利潤追求を目的とするのでなく利益は奉仕の結果として企業に与えられたもの。高度成長日本は、静六に順風満帆の追い風を送り続けた。ドイツに向かう貧乏な静六が貨物室みたいな三等船室で友人からの励ましの言葉「望みある身と谷間の水は、しばし木の葉の下を行く」を思い出しながら1952年、85歳、伊豆の自宅で天国に旅立った。